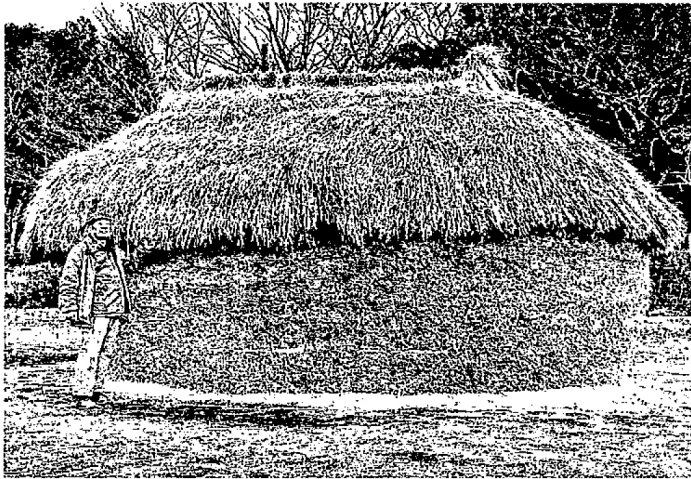


新聞記事切り抜き

見沼田圃の市民活動が『プロジェクト未来遺産 2014』に登録決定

読売新聞 33面 (地域面) 平成26年12月19日 (金)

見沼田んぼ保全 未来遺産に



約50年前まで見沼田んぼ周辺で作られていたわら塚「フナノ」(さいたま市見沼区加田屋で)

日本ユネスコ協会連盟

歴史の継承など評価

さいたま市と川口市に広がる「見沼田んぼ」の保全、活用に取り組み「未来遺産・見沼たんぼプロジェクト推進委員会」の活動が、日本ユネスコ協会連盟(東京)の「未来遺産」に登録された。未来遺産の登録は地域の文化や自然遺産を100年後の子どもたちに伝えていくのが目的で、新井一裕委員長は「見沼田んぼの良さを県民にさらにPRしていきたい」と喜んでいる。

見沼田んぼは東京近郊に残る緑地で1260畝のうち約4割が農地。江戸時代中期に干拓されて稲作が盛んになり、現在は野菜や花の苗木も生産されている。同委員会は2011年4月結成。現在は17の市民団体と埼玉大など三つの教育

機関で構成している。各団体が連携し、年間を通して農業体験や環境学習、歴史文化の継承活動に取り組んでいる点が評価された。

未来遺産の登録は09年度に始まり、日本ユネスコ協会連盟が登録された団体の活動を資金面で援助している。今年は21件の応募のうち3件が選ばれ、登録数は全国で52件となった。県内では熊谷市に生息する淡水魚ムサシトミヨの保護に取

稲わら貯蔵「フナノ」再現

未来遺産に登録された見沼たんぼプロジェクト推進委員会の活動では、稲わらを貯蔵するわら塚「フナノ」を再現したことが高く評価された。フナノがいつから作られ始めたかは不明だが、見沼地域の農家は古くから稲刈りが終わった田んぼにわらを積み上げ、コメや風呂をたく燃料や農耕牛の飼料として使ってきた。

NPO法人見沼ファーム21は2007年から、農家の助けを受けながら見沼自然公園近くの田んぼでフナノの復元に取り組んできた。今年は11月上旬に地元有志ら約100人が約9十分のわらを数日間かけて積み重ね、高さ4畝、幅5畝、奥行き2・5畝のフナノを作った。

各地で作られるわら塚の多くは円筒形なのに対し、フナノは楕円形で、全国でも珍しいという。山林が少なくまきを手に入れない地域では貴重な燃料だった。約50年前に電気やガスが普及し始め、減反政策の影響もあり姿を消した。

未来遺産登録について、副理事長の岡村肇人さん(75)は「農家がわらを大事に扱ってきた歴史を伝えたい。農業の大切さを考え直すきっかけにもなる」と喜ぶ。

見沼ファーム21は来年2月15日までフナノを残し、その後は希望者にわらを無料で提供します。

問い合わせは理事長の島田由美子さん(048・6886・2805)。

り組む市民団体「熊谷市ムサシトミヨをまもる会」の活動に次いで2件目。